

令和8年3月16日

遺伝子組換え実験/動物実験 外部評価

今年度に生命誌研究館の委員会で承認された遺伝子組換え実験は11件で新規が3件となっている。そして、動物実験が13件で新規が3件となっている。年度初めの2025年の4月3日に実験安全管理講習会が開催され、研究のトピックスとしてシンテニー解析の結果、系統関係としてクシクラゲがカイメンよりも根元に位置づけされたことが紹介され、生命誌研究館の動物実験において<海綿・クラゲ以上の多細胞動物が対象>だった文言を<海綿・クシクラゲ以上>改訂されたとの報告がなされた。また、全館員に対して、動物実験と遺伝組換え実験(カルタヘナ法)の法制上の関係が明確にわかるように提示され、遺伝子組換え動物についても安楽死、微生物はオートクレーブによる不活化をすることの徹底が図られた。また、ゲノム編集でも合成RNAを用いる場合は遺伝子組換え実験ではないことが明示され、それらのガイドラインに応じて実験を遂行するよう講習が行われている。それらの講習にもとづき申請された各課題について、すべての実験が安全・かつガイドラインに沿った実験がされたことを確認した。また、外部委員からは、日本実験動物学会が動物実験の最低2名の外部委員による外部検証を行うことを推進していることが告げられ、本館においてはすでに3名の外部委員によって検証されていることが確認された。

外部評価委員

阿形清和

高畑尚之

山極壽一